

## 生駒市郷土資料館新設準備検討懇話会第8回会議録 (要点筆記)

- 1 開催日時 平成23年6月1日(水) 午後3時～午後5時
- 2 開催場所 生駒市コミュニティセンター 会議室 206
- 3 出席者 (委員) 浦西会長 山本副会長 小林委員 樋口委員  
吉田委員 西川委員 臼井委員 神委員  
(事務局) 長田生涯学習部長 西野生涯学習課長  
錦文化振興係長 浅井生涯学習課職員 伊田生涯学習課職員

欠席者 山田委員 吉川委員

- 4 会議の公開・非公開 公開 傍聴人数1人 西村康弘

### 5 議題

会長あいさつ

- (1) 第7回会議録の承認について
- (2) 報告書(案)について

### 6 審議内容

- ・第7回会議録の承認について  
訂正箇所 2箇所  
訂正のうえ全員承認

浦西会長 お手元に1回から7回までの議事録が送られてきていると思う。1回から7回までとても読み応えがあった。積み上げというのはすごいなと思っている。皆さん方の貴重な意見をいただけてよかったと思っている。続いていよいよ今回含めてあと2回で終わりとなり、懇話会の報告書として教育委員会に提出するということになるかと思うが、今回報告案を中心に、そして報告案の最後にある、郷土資料館がオープンするという段になって、実現できるかどうかは別として夢や、こういうことを目指していくということも含めて最後のまとめになればいい。委員の思いを最後のまとめに含めばいいかなという思いがあるので、それも含めて懇話会の報告書の内容についてご検討していただければと思っている。また訂正箇所も含めて、ご意見をいただきたいと思っている。

小林委員 前回の中間まとめ変更点説明

浦西会長 小・中学生の授業との関連も見込まれるという表現にしようということか。いろんな模索をしないとけないが、狭い資料館なのでどういう使い方が資料館、あるいは学校の立場からできるか、という検討課題が残るが今後いろいろな活用ができるというような流れを残しておこうということですね。他にはどうか。

西川委員 資料館について展示はもちろんだが、館内の案内に重点を置いてほしい。資料館に訪れても聞く人が誰もいない。勝手に見て帰るといったものが多い。入れば誰か案内してくれるという状況を作ってほしい。またボランティア育成に3年～5年をかけ、責任を持って答えられる人材を確保するという事は言うまでもない。しかし、一

一般的に市民が来館された場合、農家で使用する民具であれば、農家の高齢者の方々にお願ひし、少し研修も受けてもらえれば、苦勞話やその時代の話も含めて説明していただけるのではないかと考えている。午前・午後に分かれて、それぞれ昔の仕事をおもしろおかしく説明してもらおうなど、入館者を飽きさせないような雰囲気であれば、つたない説明でも喜んでいただけ、入館者も増えるのではないかと思う。もう少し敷居を下げると、とくに市民や子どもたちの目線に立ったものになるのではないかと思う。予算削減や人員不足で運営の厳しさが深刻となり、休館や閉館に追い込まれる博物館が多い中で、館内で気軽に対応できるボランティアの存在が必要である。ついでに言うところの生駒の歴史と文化財のマップがあるが、これに映像等交えて説明をするなど、こういったことを土曜や日曜、祭日を中心に時間を決めて週に何回か、短時間でもいいので話をしてもらおうと、逆に現地へ行って見てみようと考えてもらえるのではないかと思う。また文化財を企業に貸し出すということによって寄付をもらえたり、企業が地域とのコミュニケーションのきっかけになるというメリットもあると考える。学校単位もいいが、普通の親子連れも引き込む。それから展示物の中に元の庁舎の改装前の記録写真や結婚式場として利用された写真等もぜひ展示をしてほしい。ボランティアの方については、年間フリーパスを渡すなど、ボランティアの方にもメリットになるようなことを考え、たくさん来ていただいたら交代でまわしていけば大丈夫というような状況を作っていければいいかなと思っている。とにかく来館者の方々を退屈させない、来て帰るときには感動を与えるものがあればいいなと思う。

浦西会長 今のご意見が入られるのは、主に 23 ページあたりの「ボランティアの育成・確保」、あるいは「みんなのためにみんなでつくる」といったところや、「市民参加」などの部分に関連する項目になるだろう。

神委員 生駒山を越えたところの大東市というところに歴史民俗資料館があるが、そこでは学芸員が二人と、市民学芸員というボランティアがいる。ボランティアという有象無象なところがあるが、市民の学芸員という形である程度の格を与え、一緒に神社に行き絵馬を調査するなど学芸員補佐、サポーターとして活動している。単なるボランティアではなく、ある程度内部にも興味を持っていただいて館を支援するという意志の強い方々、つまりボランティアというのではなく市民学芸員という言葉である程度の位置づけをしっかりとあげること、我々が思っている「みんなでつくる」という部分に当てはまる。このように少しでも市民がやる気の出るような名称や役職をつけてやっていただくのはどうか。さらに昔から友の会というものがある。今回も友の会やサポータークラブに入っていて活動に集中していただけるような受け皿を作っていくことがいいと思う。

浦西会長 運営のあり方の中にも市民の力を生かすという生駒市のひとつの考え方のなかに今ご意見いただいた部分を反映していければと考える。

臼井委員 いろんな話をずっと振り返ると、最終的には賑わいみたいなものが必要である。要はリピーターの問題で、どうすればリピーターができるのか。もう一度考えると、運営側というのは発信を失敗するとアウトである。発信を失敗すると、誰も知らないのにスタートしているという最悪な状態になる。今はパソコンの時代であるから、資料などもデジタル化しどこからでものぞける、そしてのぞいた上でやっぱり現物を見てみたいと思う、といったようなラインは残していかないといけないと考えている。もうひとつ、来場者側は何をやったらもう一回行かざるを得なくなるかを考えていると、私は個人的に茶せん割りをやっているのだが、割りというのは工程

がいっぱいあり、一回行っただけでは終わらない。何回か顔を出しているとやっとなんか作品ができあがり、自分の茶せんが完成したという満足感が得られる。どうしても足を運ばざるを得なくなるようなものをある程度残した方がいいだろう。私は以前、勾玉作りをしたが一回で終わってしまった。そういったものではなく何度も足を運ぶようなものを考えていけばいいのではないか。茶せんというのはものすごく時間がかかる。キーワード的に言えば「そこにいた足跡」というのが必要だと思う。ずっと昔になると花博ではお金か何か出すと名前が残るものがあり、自分の名前が一生残るのならば、ということでお金を出したものだ。そういうなにかを考えないといけないと思う。やり方は汚いがそういう視点もちょっと残してほしい。

浦西会長 デジタル化して、外部に活動の情報を発信するという部分をどこかに入れておく必要がある。何度も足を運んでいただくという方法もどこかに入れていただきたい。

神委員 事務局に伺いたいですが、こういうことをやっているということ、広報いこまに載せるということは別に問題ないですね。最近はウェブやインターネット、またチラシやポスターで紹介というのはだいたい一般的だと思うが可能なのか。

浦西会長 当然、館がオープンしたらそういうことをやらないといけないことだと思う。ホームページを作って広く徹底することが大事だ。

神委員 臼井委員の茶せんの話があったが、普通は2時間ぐらいでできると考えがちである。それを逆転の発想で、できるまで何日もかかるようなものだと、確かに行かざるを得ない。これはおもしろいかもしれない。

浦西会長 生駒市郷土資料館ができて、人を集めるためにはどういう企画を広くするのか。一例を他県であげていただいたが、これを完成するまで提示してもらい、親しみを持ってもらう魅力ある企画が求められるかと思う。資料館の核が求められる部分である。いろんな可能性があるわけだが、その企画を出すことについては若干の予算も必要であるので、そのバランスがどれだけとれるのか。あとは、たくさん来ていただきたいというのは当然のことだが、それを実現できるような企画などを考えないといけないと思う。

吉田委員 デジタルも非常に重要だが、アナログの話もしたい。これは「みんなでつくる博物館」というところに入って来ると思う。博物館が出す冊子のようなものは、いつもカタログ的なものや、文化財の紹介、研究報告とかである。それはもちろん必要であるが、そうではなくて、投稿雑誌はどうだろうか。冊子だから5ページぐらいのもので、全編市民からの投稿のみで、テーマを決める、あるいは文化財を中心としたものはどうだろうか。あまり固定的に考えずに、インターネットからも投稿でき、その投稿作品を集めて、皆さんにみてもらう。投稿で成り立っている雑誌がある。それはみな表現がしたいという気持ちがある。そういうものが自分の活字になり、文章というのは非常に喜びを感じる。単に活字だけでなく、絵であってもあるいは書であっても喜びを感じる。かつて大正時代にあった愛郷新聞の後継新聞として生駒新聞というものがあった。この生駒市で歴史・文化について興味を持った人たちが、理想なり研究なりをいっぱい書いたものが出ていた。それが原型ということで、たとえばキーワードとして行基があがっていた。行基を取り上げた場合に、竹林寺や、そういうものだけをやってはだめである。行基というのは竹林寺、大阪の家原寺、喜光寺の3つの拠点である。その3つの場所を連携する、あるいは忍性、これも竹林寺である。これは鎌倉時代の行基の精神を受け継いだ人であり、この方を取り上げるようになった場合、忍性だけを取り上げて「竹林寺と忍性」というこ

とであってはだめである。もちろん郡山の額安寺、あるいは鎌倉の極楽寺、というものに墓誌がでていっているわけであるから、そういうものを連携して、タイアップしていけるようなものをやる。美努岡萬も墓誌が出ている。しかし美努岡萬はほとんど一般に知られていない。そういうものを「こんな墓誌が出た。美努岡萬の墓がある」といってもわからない。美努岡萬の文化財としての、できるなら先ほどの行基の墓誌でもそうだが、そのぐらいの広がり、連携をやっていくべきではないかと考える。それともうひとつ、ジオラマはどうですか。私が一番印象に残ったのは太子町にある竹内街道歴史資料館のもので、狭いし暗いのだが正面の壁全面に竹内街道を中心とした地形模型が貼ってあった。そういうものをたとえば生駒山、そして生駒谷、矢田丘陵、北と南ですね、こういうジオラマを作るのはお金がかかるのか。お金はかかるだろうが、そういうものができないかなと思う。まさに生駒が一目見ただけでわかる。そういうものができないかなと考えた。

浦西会長 なんかの形で生駒、生駒谷も含めてこの郷土、地域社会というものを一目瞭然で見られる地図というのは小・中学校にも必要であるし、大人にも必要である。そういうのは資料館の精神としては、むしろ必要である部分であろう。予算はさておき、あるべきだということをごどこかに書いておいてほしい。見ながらまわるのは楽しい。そこにいろんな情報をどれだけ入れるかによるが、いろんな情報を入れておくことで子どもは子ども、大人は大人、農業をする人は農業をする人、工場の人は工場の人でいろんな形で地図を読み取ることができる。これは無限の可能性のある展示物なので、しっかり考える必要がある。

臼井委員 ある程度ベクトルをしっかり持っておかないと、資料が混在してしまう。やっぱり私はどうしても文献資料に目が行く。そういう文献資料のベクトルと、生駒の文化とか郷土などのベクトルを含めて、一般市民たちがかつての生駒を知って触れていくということ、ある程度構想の中においておかないと、なんでもいから入れてできましたというのは難しい。結局ニーズが少しずつ違う。階層ごとにはほしいものが違うと。この辺はやっぱり構想の中に入れておいてほしい。

浦西会長 限られた展示スペースで、いろんな大風呂敷を広げても展示できないわけであるから、その資料館の性格、生駒の歴史ということを見ると、生駒の地図と古代から現代までの時間の流れの基本的な部分が展示に必要になってくるが、いろんな要素をどう扱うかということを検討していかないといけない。今の意見も十分反映させていかないとあれもこれもとなる可能性があるの、気をつけないといけない。

樋口委員 発信についておっしゃっていたように、今の子どもたちはネットが発達したことで、本当に活字離れが深刻になっている。ネットの世界だけは小学校1年生ぐらいの子から、非常に進んでいるし、ネットの中で関われるという力を持っているので、いろんなニーズやいろんな要素等を持った資料館に、興味・関心を持たせるなど、あらたに子どもたちが入ってくる部分として、ネットの世界というのは外せないように感じる。それをいかに発信していくかが、現場に来てくれることにつながるような大きな要素となるように思う。学習の中でも、もちろん書籍からも勉強するし、いろんなところから勉強するが、やはりネットを使う子どもたちが多。なんかのキーワードを打ってそこから生駒の資料館が出てきたときに、足を運んでみようかなと思わせることが大事だ。逆に先ほど投稿とおっしゃいましたが、活字にして投稿というのはなかなか今の子どもにはできないことである。しかし、書き込みとかそういうものについては非常に長けたものがあるので、ウェブの世界で子どもたちがいろんな情報を得たり発信してくれるような、そこから一回生駒の資料館に行ってみようかなということになればいい。

浦西会長 デジタル化など含めて、それは大きな発信源になるし、受け皿にもなる。

吉田委員

インターネットや世界的なグローバル化について、これは余談になるので非常に概念的な抽象的な話ですが、イタリアの指揮者ジュゼッペ・シノーポリという有名な方が2000年に来日した。劇作家の山崎正和さんが対談したのをコラムや新聞で3回ほど連載した。このグローバル化、ネット時代にコンサートや劇場などの芸術はどんな役割を果たしているのかというポイントを、シノーポリは音楽や、絵画、演劇とかに絞らず、文化という表現をする。そこで小さな村という概念を出した。私はあまりよく説明できないが、やはりインターネットは元凶だといっている。インターネットによって小さな村が壊されてきた、壊されてしまった。彼はヨーロッパの人だから、小さな村というのがどういうイメージだったのかはわからないが、昔の村というのは非常に境界が厳しかった。しかしその境界の中に入ると割りと自由にできる。私はその小さな村とはなにかというと、文化の記憶装置であると考え。現代ではライフスタイルが変わり、ネット社会が発達したので、それ無くしては生きられない。そしてその世界で生きているのに、それには満足できない。そういうものではなくて、自分の身体を使ってコンサート会場に行くんだ、劇場に行くんだ、美術館へ行く。そこでは隣の人は見知らぬ人である。しかし絵を通して、あるいは音楽を通して共感が生まれる。ともに感動し、ともに拍手する。そのために、劇場や美術館へ行く。そういう場所が小さな村である。だから、その小さな村を取り戻すことによって、文化の記憶装置も取り戻そうと。文化の記憶装置というのは、この資料館や博物館、ずばりそのものである。そこへ行って、何を求めるか、体で感じるふるさと、そういうものを見つける、そういう場所であるべきだ。じゃあ一体何をするのかということになるが、それはみんな考えよう。つまり考える資料館であり、そしてまたそれは成長していく資料館である。ただ、他の資料館と同じにすることはない。つまり新しい、これまでにとらわれない発想でなにかをやっつけよう、そういうような部分を具体的にいろいろやってきた。ただ、そういう場所でありたいな、そんな場所であつたらいいなという風に私は考える。

浦西会長

委員の皆さんもそういう館であってほしいなという風に思っていると思います。

吉田委員

ついでだが、つい2・3週間前、フリーペーパーで、博物館というのが目に入ったので読んでみた。内容は国立民俗学博物館の廣瀬さんという全盲の准教授の方が書いておられる文章で、彼はさわる博物館というものを考えた。それ以来、さわる博物館というのは国立民族学博物館の目玉となった。それから、たとえば高齢者、子ども、外国人や障がい者、こういう人たちもそこへ行ける資料館を考える。じゃあその障がい者を受け入れるためには段差をなくしたり、階段に手すりをつけていますよ、とかそういうことではない。そのフリーペーパーの内容で、私自身おもしろいと感じたのは、「みんなで作る博物館、みんなで作って誰でも楽しめる博物館」というところだ。それはたとえば単に障がい者にやさしくするのではなくて、障がい者自身がやさしく文化財を取り扱い、触る。これはゆっくり非常に時間をかけて行う。時間をかけて触ることによって、想像力などを受け止める。これは障がい者に対して、障がい者だからこうすればいいんだというのではなく、障がい者自身が主体的に自分の問題として文化財を受け止める。そういう研究をされているらしい。健常者が健常者に対して見せてやるというのではなくて、だれもが楽しむ、そういうマイノリティも含めての資料館である。という視点も必要であると考え。それをどうするのかというのも難しい問題である。こういったことを考え、少しずつ実現していくということでしょう。

神委員

今お話されたことはとても大事なことだと思う。役所や主要な施設では「バリアフリー」という言葉がある。しかし今はバリアをフリーにするよりも「ユニバーサルデザイン」という言葉を使う。つまり外国の方も、子どもからお年寄りまで、その施設を分け隔てなく利用できる、というようにすることである。今の話はまさにそういうことであると思う。

吉田委員

ユニバーサルミュージアムというものです。

神委員

そうですね。その大元に「ユニバーサルデザイン」という言葉があって、ぜひ今回にもユニバーサルデザインの視点から設計せよという形で一言入れていただくという段階でまとめていきたい。しかし前に私が言ったような、世の中はリアルとバーチャル・リアリティの二つに分けられるということで、結構子どもたちは実際足を運ぶよりもネットの世界できっかけを作っている。博物館はなにかというリアルな世界であり、やはりリアルな世界では参加体験制ということが大事である。やはり博物館に来てまでパソコンをやるのではなく、博物館に来たら本物に触れることが大事だ。私は子どもの頃青森県にいたが、そのときに亀ヶ岡式の縄文土器という硬い土器を掘ったときの触感や、そのときの風景を今でも鮮やかに覚えている。いかに体験ということが大事かということである。博物館に来て初めていろんなものに触る子どもたちがいると思う。そのときに昔の人たちはどんな暮らしをしていたかなど考えることで、子どもたちはここで一生モノの知識を得たのではないかと思う。「参加体験制」というものにとことんこだわってあげたい。博物館・資料館であるから、資料や物にこだわるということのを忘れてはならない。その延長でもうひとつ、いい物にこだわっても設備が悪くて持って来られないということが多々ある。そのためにもしっかりしたエアタイトケースや、きちんとした設備ケースを用意したほうがいい。たとえば文書だと湿度 50 パーセントなどいろいろ設定がある。また照度も細かく設定している。それにきっちり合わせて、いいお宝を持っている人に「このケースだったら貸してあげるよ」と言って貰える様なケースが無いと貸してもらえない。いいモノが来なければお客様にすらありつけないということだから、全部が全部というのは大変だが、少しでもそういう設備をもつべきだと思う。それから、最初にかかるお金をケチってもあとの電気代や、修理・修繕に費用がかかたりすることがあるので、建ててから終わるまでどれぐらいの費用がかかるのかというライフサイクルコストを考える。たとえば LED 照明は最初はお金がかかるが、4 年ぐらい経つと元が取れると言われている。多少最初にお金がかかっても長い目で見るという視点も重要だ。つい安いほうを選んでしまつてあとでとても高くついてしまったということがないように。ライフサイクルコストという視点も設計の段階で十分配慮していただきたい。ずいぶん泣いている館がいっぱいあるので申し上げておきたかった点である。

浦西会長

ありがとうございます。まだまだいろんな意見があると思うが、報告書の体裁のことも念頭に置かないといけないので、私のほうからお願いしたいことがある。目次の、第 1 章「郷土資料館新設までの経緯」に、なぜ資料館新設に踏み込むのかという第 5 節という部分を入れてもらいたい。「郷土資料館新設への動き」という形で、前回生駒市郷土資料館新設検討委員会というものを立ち上げたいきさつがあるので、この第 5 節に生駒市郷土資料館新設検討委員会の内容を少し入れてもらい、それを「郷土資料館新設への動き」というような第 5 節がなければ、第 1 章が完結しないのではないかと思う。また、郷土資料館新設検討委員会の報告書というものも経緯のひとつなので添付資料としてつけてほしい。郷土資料館新設検討委員会報告書は第 5 節に入れるといいと思う。今回の懇話会の発言の多くは市民参加の博物館を目指してという話が多かったので、第 3 章では、「資料館の機能～市民参加の博物館を目指して～」という副題をつけて、その背景として市民参加は当然のことであるが、その基本となる資料の収集保存・調査研究というのが土台になる。第 1 節・第 2 節は当然ながら収集保存・調査研究にして、第 3 節～第 7 節までを市民参加の博物館を目指して、登録有形文化財建造物の活用、展示、体験学習、情報発信の生

駒市を知る拠点として、今回検討した主要な部分が大きくこの報告書の中に反映されていることになればいいと思っている。それと第4章「資料館の運営」について、その第2節「指定管理者制の導入」という表現では懇話会のトータルの意見にはなっていないと思うので、ここでは「指定管理者制度の導入とその問題点」というような表現が適切だろう。第3節は「運営資金の確保」という言葉よりも「運営資金について」という表現のほうがいいのではないかと思う。第4節・第5節は「ボランティアの育成確保」、「みんなのためにみんなでつくる」という副題になっているが、これも「生駒市の郷土資料館活用のためのボランティアの育成確保」、あるいは「生駒市の郷土資料館新設のためにみんなでつくる」というのが必要かなと思う。このような感じでまとめていただければ、と思う。そういう体裁で全体を通して読んでみると、我々の懇話会の主要な話題になった部分というのが、このように集約されるのではないかと思う。この資料館の目指すところは、やはり生駒というところの環境や、あるいはかけがえのない平和や安全である。こういう大震災が起こっている時代であるから、そういう配慮もどこかに入れておかないといけないのではないかと思うので、このコンセプトの外側でもいいのでつながるキーワードの中に環境・平和・安全という言葉と資料館の運営についての視点をもってほしい、という部分は入れておいたらいいいのではないかと思う。目次と前回の検討の報告書も我々は意識しているということも加味していければと思っているがどうだろうか。

神委員 ひとつだけ気になったのは「指定管理制度の導入と問題点」というところは、「課題」と言い換えたほうがいいのではないか。

浦西会長 指定管理者制度の導入というと、こういう形で決定という言葉になってしまう。やはりここでは若干の課題があるということなので、課題という言葉が適切である。なによりも市民参加の博物館を目指してということから、この6回7回の並びの中でいろんな意味で生駒の郷土資料館の目指すところだという発展になるのではないかと思う。その前段として資料の保存・調査・研究というのが必要であるということは1行、2行は入れておかないといけない。あと先生方の意見にあったとおり、この企画・展示あるいは活動、そして運営という意見もそうだが、これは無限の可能性があると同時に、無限の失敗もあるわけなので、それぞれの立場に立った人が努力していかないといけないことになる。しかし全体からして、郷土資料館新設という方向に向かっているというのは生駒市自身としても、生駒市民にとっても大きな前進になる。文化的なところでは前進しているということになるので、市のためにいいものができるということではないかと思う。市民にとってはプラスになるのではないかと思う。その活用の仕方は運営する人々、それと生駒市民がどう絡み合っていくのかにかかってくるのだろう。そしてその絡み合い方については、委員の先生方からいろんな意見が出ているのを参考に、この報告書の中に生かされていると思う。私の方から気になる部分について言わせてもらった。ここでまとめにかえてというのか、郷土資料館に寄せる夢がありましたらご意見いただきたい。いくつかの現実に近い夢から、吉田委員が言われたように、単なる生駒市の郷土資料館という郷土のものを展示するだけでなく、生駒市の人があんなものが生駒市と関係あるのかという普遍的な、幅を持った展示を目指すことが大事なような気がする。そういう意味ではこのコンセプトの中の生駒山とか川とか道とか、たどっていけば永遠とどこかで結びつくわけである。空間も広がっていくという意味で、道、山という普遍的な問題が生駒市が持っている文化形態なのである。そういった幅広い展示も可能であればいいと思う。ほかにご意見どうですか。

吉田委員 五條に鉄道模型を展示して、子どもがものすごく集まったところがある。これは今

の資料館で現実にするわけではないが、道というのは単なる街道ではなく、鉄道も含まれるだろう。そのときに資料館が主催で、たとえばの話、近鉄を絡ませて、近鉄からもお金を頂く。そして模型を走らせる。今鉄道ファンはとてとてもたくさんいる。そういう子どもがわんさか来るのではないかと思う。

神委員 五條は指定管理ですね。

浦西会長 一度閉館にしまして、柿の葉寿司の田中さんのところが受けて元おられた館長さんと呼んで、オープンした。

吉田委員 北倭村が全国的に表彰され、模範村に選ばれたほか、里子の村と評判になったことがある。私は里子やそういう問題ではなしに子育てということに焦点をあてたい。今の子育てというのは非常に若いお母さん方が苦しんでいて、保育園も地域貢献とか地域の子どもたちを育てる時代になってきている。去年の暮れも子育ての展示会があった。ある男性が見に行行って感動して帰ってきた。なにに感動したかという学芸員の方がものすごくいい説明をされた。子どもを育てていくということはどれだけ親たち、あるいは地域の人たちが子育てに力を入れたかがわかる。彼は並んでいるものだけではなく、説明にも感動していた。これは先ほどの話ではないが学芸員の説明の仕方にせよ、そういうところがテーマがあり、そこから発展させて、子育ての問題をもう少し考える。そういうテーマもいろいろあるのではないかと思う。

浦西会長 この博物館というのは本当に昔のように物を並べるというのではなくて、今おっしゃっていただいたようないろんなテーマ、子育てあるいは老後などというようなテーマを我々が設けて、講演はできないけれども、生駒市を考えていく。博物館はもともとそういう機能を要する施設なのでテーマは無限に考えられると思う。生駒市の著名な方々に応援してもらったり、そういう人材も視野に入れながら、人パワーというものを活かしていく。そういう意味でも可能性の大きな市である。

山本副会長 事務局に質問だが、昔のおもちゃなどの寄付というものはないのか。子どもを一番に考え、加えて親が来るということなら、子どもは一番なにを楽しみにくるのか。そういったことをどういう風に伝える、知らせるのか。こんな難しい字を書いてあったって興味を持たない。やはり一目見ただけでわかるようなポスターなどを作ることが大事だ。あまり硬いものを出したら、お役所の感じになってしまう。子どもに興味を持ってもらえるような、また子どもが一番大事にしてもらわないといけないので、おもちゃなど無いのかなと思った。おもちゃの変化も文化の大事なことだが、子どもを引っ張ろうと思ったら、食べるものをやるとかになるか。戦争前や終戦ごろから大きな変動がある。闇米を分け合って食べないと生きられないような時代を過ごしてきた。そういうことが人間の原点であるので、衣食住というのは今みたいに食べ物が多くあると何を言っているのかというものだが、そういう話ができる場も必要ではないかなと感じる。おもちゃかそういうものがあれば、子どもの日みたいなきになにかを作ってやるなどして、財産を次の時代に送ってもらわないといけない。代々つながっていくというのが文化財の一番大事なところだから。

西野課長 前にも話しましたが、夏に勾玉作りをしたときは、子どもたちに非常に人気があり、去年に350人、おとしに400人集まり、本当に子どもたちに楽しく参加していただきました。文化祭か何かの展示会のときに、竹細工で動物を創作された展示を見ました。そういうのを含めて、今おっしゃっていただいたような企画などをご提

案いただいて進めていきたいと考えています。

浦西会長 他にありませんか。今日いろんな形で意見を出していただいたものをもう一度報告書に反映させていただいて、そして各委員の先生方に送り、最終的なまとめをしていきたい。

長田部長 市長のほうから宿題を出されていて、ぜひ知恵をお借りしたいことがあります。それは建設にあたって、市民の皆様方から資金を集められるものなら集められないかなということ。その方策や方法を、もし皆様方でなにかお知りのことがありましたら、またこうすればいいのではないかな、というようなことがあれば、次回にでも教えいただきたいなと思っております。建設の段階からなるべく市民の皆様に参加していただく、というのが市長の考えでございますので、どうぞよろしく願いいたします。

吉田委員 25年にオープンするとなるとちょうど建物が80年だから、その点で盛り上げてはどうか。

長田部長 単に寄付を募るだけでなく、こんなものを売って資金にすればいいのではないかなどいろいろな考え方があると思いますので、知恵をお借りして、いろいろ検討させていただいて進めていきたいと思っております。勝手な思いで申し訳ございませんがよろしく願いいたします。

浦西会長 登録文化財になったことは生駒市民には知られているのか。

長田部長 はい。広報にも載せています。

浦西会長 指定文化財になったものを資料館にするのだというようなメッセージを、新聞社とかに広報していくやり方を徐々にやっていかないといけない。

長田部長 新聞社にも流しています。やはり市民の方に感覚的に感じていただくことが必要であると思っております。そして市民の方に大事なものだ実感していただかないと、なかなかお金も出していただけないかと思えます。

神委員 募金もいいが、博物館便りはどうか。

長田部長 そのような意見をいただきたいと思えます。

浦西会長 次回までの宿題としましょう。

・その他

次回（9回会議）は、7月1日（金）午後1時から。

以上